

# 南青協便り 第224号



南米産業開発青年隊協会会報

2023年12月10日発行

Boletim n.224 Seinentai do Brasil : Edição 10 de dezembro de 2023



トルコ・イスタンブールのボスポラス海峡。左上流の黒海からマルマラ海・地中海へ向かう貨物船。ロシア・ウクライナ戦争のため少数の船のみ通過中  
Um navio passa o estreito Bósforo que liga o mar Negro ao mar de Mármara e marca o limite dos continentes asiático e europeu na Istambul da Turquia. Passando poucos navios devido a guerra entre a Rússia e a Ucrânia. (42 頁)



11月25日静岡県富士宮市で70周年記念大会・懇親会が開催されました  
Foi realizado o grande encontro do SEINENTAI na Fujinomiya em 25/11/2023,pag.47

## 目次(第 224 号) ÍNDICE(n.224)

一、トルコ・イスタンブールのボスポラス海峡	
1 1月25日静岡県富士宮市で70周年記念大会・懇親会開催さる .....	1
一、Índice 目次	.....2
一、パラナ懇親会              フォス・ド・イグアスー 単独 齋藤信夫 ...	3~8
一、ウクライナ戦争の真実              サンパウロ 9期 貝田定夫 ...	9~14
一、ルーラ政権の腐敗              サンパウロ 9期 貝田定夫 ...	14~15
一、【会計報告】9月10月              サンパウロ 8期 長田譽歳 ...	16~17
一、富士宮市西部から見た割れ目が見える富士山              写真 ...	17
一、自分史(42)                              ポルトガル 10期 岡井義重 ...	18~23
一、慰霊祭に参加して                      ジュンジアイー 9期 荒木昭次郎 ..	24~25
一、光陰矢の如し                              アラサツバ 8期 丸谷良守 ...	26
一、カナダ・トロント旅行記              サンパウロ 8期 長田譽歳 ...	27~33
一、思い出                                      広島県 6期 三戸伸晃 ..	34~41
一、イスタンブール訪問      S・M・アルカンジョ 8期 志方進 ...	42~46
一、青年隊70周年記念大会報告              富士宮市 8期 志方進 ...	47~49
一、【編集委員】 【次号予定、お願い】 【お知らせ】 【編集後記】 .....	50

**【訃報】** 渡辺尊人氏が8月13日に逝去されました。

高橋良明氏が10月9日逝去されました。

お二人のご冥福をお祈り申し上げます。



## パラナ懇親会

フォス・ド・イグアスー 単独 齋藤信夫

パラナ州の青年隊懇親会は、去る10月7日午後から9日朝までの2日間開かれました。コロナ渦で、集まる機会もありませんでしたが、今回実に5年振りの集いでした。

一番の遠方は Londrina からで、七期の故畠山さんの奥さんと2人の娘さんのご家族でした。今回の集会のために、貸し切りの大型 van で、Londrina を7時に出発、そして途中、Maringá と Umuarama で他の仲間たちを順次乗せて、イグアスーの私のところに到着したのが15時頃で、全員で15名でした。それに私共夫婦を加え今回のイグアスーでの懇親会は17名での会となりました。皆さん長旅の疲れも見せず、久しぶりの逢瀬に、肩を抱き合い、お互いの健康を祝しあいました。

そしてまずはビールとジュースで乾杯をしました。久しぶりの逢瀬に会話が弾みます。頃合いを見て取って置きで秘蔵の（本当は貰い物ですが）なんと52年物のシーバスのウィスキーを出してきました。

これは最近サンパウロから当地に引っ越してきましたコチア青年のOBが名刺代わりですとプレゼントしてくれたものです。彼は下戸で貰い物のこのウィスキーを、物置に40年もほって置いたそうなのです。

12年物を40年物置に投げたままだったので合わせて52年です。シーバスは良品ですが、安物のウィスキーでも50年もたちますと、まさにまろやかで、別の飲物の如くです。

昔、知花のシャーカラで、何年目かの記念会を催した事がありましたが、あの時故本間さんが持ってきました、ピングアの60年物を、飲ませて頂きましたがこれもすごかった。ピングアでなくまさに別の「何か」のような味でした。ピングアとは全く違う飲物でした。

開高健という、酒飲み釣り好きの作家がおりましたが、彼はブラジルヘッドロード釣りに来てピンガを飲み「これを20年、30年寝かせたら、うまいもんになるだろうねえ」なんて言っていたが、まさにその通りでした。

私はこの頃は外で飲む機会が殆ど無くなりまして、いつも一人酒手酌酒で演歌を聞きながらなんです。この夜は久しぶりに、仲間達と飲みまして酩酊しました。50m程離れた同じ敷地内の我が家に帰るのに、人の肩を借りていく始末でした。

一夜明けまして、今日は滝見物に行きます。昨夜飲みすぎて、2日酔いを心配したのですが、大丈夫でした、快適です。皆さんが乗って来られた、大型Vanは国立公園に、入園できません。公園に入れるのは当地の、Taxiで市役所の観光課に登録済のものと、やはり登録済みの旅行社の車両に限られているので、私のところのバスで行くことにしてありました。

公園の入口で手続きを済ませ、バスは滝に向かって進みます。公園内は制限速度60Kmです。やがて滝に到着です。天候は最適とは言えず、曇り空です。でも40℃のカンカン照りよりは好いかもネ！

ものは考えようです。最近のパラナ州は降雨がやや多めでしょうか？対岸に見えるアルゼンチンの滝の水量が凄いです。水煙もすごくて滝の見えない場所もあります。

女性組はほぼ全員下車しましたが、男性組は私を入れて3名で、他はバスに乗って終点のエレベーターまで行ってしまいました。水煙にむせ、しぶきを浴びながら見る滝は、迫力満点、歩行するのにちょうど良い温度でもありました。

途中から遊歩道を右に曲がって下り、滝を見上げるコースと、まっすぐに進みエレベーターの上の展望台に出るコースがあり、下に行くとだいぶ濡れそうなので、上に出るコースに行く事にしまして、エレベーター上の展望台に行きました。

バスで来た何人かの人達は、エレベーターの下で待っていましたので、呼びに降りて行き、やがて全員がエレベーター上の展望台で合流です。

曇りで虹が見えませんでした、それだけがちょっぴり残念でした。虹といえば、ここではまれに3段の虹が見えることもあります。また真ん丸の虹が見える事もあります。でも今日は水量が多くてよかったです。

私も久し振りの滝見物でした。私は今まで2千数百回滝に来ておりますが、最近はこの10年で2,3回程度です。久し振りに滝を堪能しました。滝を見ますと本当に心が洗われます。私はイグアスーに来まして今年でちょうど50年です。私にとっての滝は偉大なる守り神のような存在です。いつもイグアスーの滝とともにありました。

「さあて！皆さん全員お揃いですね。ではそろそろ引き上げましょうかね」滝見物終了後、又バスに乗車しまして公園の入り口に戻ってまいりました。公園を出て200m、そこに「鳥の公園」があります。昼食前にそこに寄りました。

「鳥の公園」に入りますと、先ずフラメンゴと遭遇です。フラメンゴの周囲は何も囲ってありません、そのため去年だったか？夜ジャガーに襲われまして、今フラメンゴの数は以前の半数です。でもフラメンゴは5,6羽でグループを作り、それらが群れを成して過ごす習性があります。それでフラメンゴの周囲は塀の代わりに鏡で覆ってあります。そうするとフラメンゴはそこに映っているのを自分たちとは思わず、仲間が沢山いるなど安心するのだそうです。

「鳥の公園」は原生林の中にあります。大小いろんな鳥小屋があります。出入口は二重になっています。最初の戸を開け中に入ります、そこには15-20名程が入れます。中に入ったら、入った時の戸を閉め、奥にある戸を開けて、鳥小屋に入ります、中の鳥が逃げ出さないように、二重にしてあるのです。そう云う鳥小屋が原生林の中に、あちこち無数にあり、世界中から集めた、珍しい綺麗な鳥が無数にいるのです。

途中で少し雨が降ってまいりましたが、ほんのわずかで、原生林の大小の樹木に茂っている葉が傘代わりになってくれ、殆ど濡れることもないイグアスの雨だった！

「鳥の公園」に入ると、途中で出ようと思っても、出口までの距離が解らない。入り口に戻ろうかと思っても、一本道でないからどう行きゃいいのか？わからない。ミステリー迷路みたいな感じも楽しめる。

大した雨にも合わずに、無事出口に着く事が出来た。駐車場のバスを呼んで順次乗車、「鳥の公園」見学は終了した。「鳥の公園」も以前に比べて大分と拡張していると感じた。人間の落し物のないよう全員がバスに乗ったところで、もう一度人数確認して、昼食の場所であるイグアスの町の中華飯店へと向かう。

「鳥の公園」からですと、イグアスの町の入り口まで12Km余り、途中道路の両側は今、道路を片側2車線にする工事中で、網を張り巡らし、その網の外側は、建設機械がうごめき大変ですが、今日は日曜日なので工事場は誰もいなく静かなもんでした。

やがてバスは中華飯店に到着。中に入りますと、今日は日曜日で超満員、座る席もありません。奥の別室に案内され、大きな8人掛けのテーブルに案内されました。

女性組と男性組に別れ、飲み物は適当に注文した。滝と鳥の公園で2Km以上も歩き腹ペコなので、皆さん健啖で、たくさん召し上がられました。満腹になりますと、眠たくなりますよね。ホテルに戻って少し休む事にしました。ホテルに戻ったのは14時ごろでした。1時間休んで、今度はビンゴーズです。

私も滝のしぶきと少しですが雨にもふられましたので家に戻ってシャワーを浴びて、着替えました。少々疲れてもいたので、缶ビールをグイッと飲みビンゴーズの商品をもって、会場に向かいました。すでに会場には数人がおり、大きなテーブルには、商品が詰まれ初めておりました。



「この賞品無くなるまで、やんのか？ そりゃちとたいへんだな！」なんてのたまう人もおりましたな。やがてワイワイ ガヤガヤとビンゴが始まりました。「Deu!Deu!ビンゴー!」と叫ぶ人、「もうかよ」と嘆く人、笑い、叫び、嘆きなど様々で一喜一憂。今日一日の疲れも吹っ飛ぶ、楽しい一時でした。

翌日は、皆さん7時ごろに Toma café を済ませまして、8時頃帰路の出発となりました。久し振りの集いは楽しい思い出になったと思います。残念だったのは、Umuarama 在住の、6期渡辺尊人氏が8月13日に亡くなられ、参加できなかつた事でした。

またの日、また楽しい集会有ればと思っております。



イグアスの滝をバックに記念写真





左から 9期羽田娘、羽田夫人、7期伊達夫人、7期畠山娘二人、畠山夫人  
单独齋藤夫人、7期藤岡夫人、9期渡辺益男夫人、1次溝口夫人・息子・本人  
7期藤岡、7期金丸、9期渡辺、7期伊達、单独齋藤





ウクライナ戦争は先に手を出したロシアが悪で、ウクライナは自由と民主主義を守る正義の戦いをしている。と欧米の主要メディアは報じているが、この戦争の真実を見る必要がある。長引く戦いに欧米諸国の支援疲れが見え始め、このまま消耗戦が続くならばウクライナの勝ち目はないだろう。かく言うのは、ワシントンに30年以上在住の国際政治学者、伊藤貫氏である。

伊藤氏は1953年東京生まれ、東大経済学部卒。アメリカのコーネル大で国際政治学と外交史を学ぶ。ワシントンのビジネス・コンサルティング会社で国際政治・経済アナリストとして勤務。国際政治に関する独自の情報源と鋭い洞察力により、大手メディアでは報道されない国際政治の真実を暴露している。伊藤氏のYOUTUBEでの発言を引用しながら、ウクライナ戦争の真実について述べたい。

現在のウクライナの地域は、中世の時代から近代に至るまで多数の民族によって支配された歴史がある。第一次世界大戦ではドイツ・オーストリア帝国とロシア帝国との戦場となり、第二次世界大戦では独ソ戦の激戦地となった。ウクライナは1991年ソ連崩壊に伴い独立国となった。

ウクライナという国を知るうえで最も重要なことは、西ウクライナに住んでいる人間と東ウクライナに住んでいる人間は全く違い、言語も宗教も異なる。西ウクライナの人間はウクライナ語を話し、ローマ・カトリックに属しているが、東ウクライナの人間はロシア語を話し、宗教はロシア正教である。しかもこのことは、およそ600年も前からこのようになっている。西ウクライナの人間は、ポーランド人、リトアニア人、オーストリア人に支配されていた時期が非常に長い。それに比べて東ウクライナ人はトルコ人に支配されていた時期もあったが、およそ230年間(ロシア帝国とソ連時代)はロシア人に支配されていた。

1917年にウクライナが出来たが、5年後ソ連に併合されてしまう。この時レーニンは西ウクライナと東ウクライナの他にノヴォロシヤと呼ばれていた地域をウクライナに入れてしまった。ノヴォロシヤは、現在ロシアが武力で占領しているウクライナの東部、ルハンシク、ドネツク、サボリージャ、ヘルソンの4州を指すが、この地域は18世紀後半にロシアがトルコとの戦争で勝ちとった領土である。レーニンはロシアの領土をわざわざウクライナに入れてしまった。何故なのか。

1917年レーニンがロシア革命を始めた時、ウクライナには多くの農民がいた。彼らは革命の嵐に直面したが、自分たちの土地守ろうとして共産主義に反対した。そこでレーニンは当時のノヴォロシヤには多くの工場労働者がいて革命に賛成する者が多いことに目をつけ、ウクライナの農民とロシア系のプロレタリアートを対立させることによって、ソ連共産党がウクライナを支配し易くしようとした。即ち、ソ連共産党の勝手な都合によってロシア系住民を無理やりウクライナに併合してしまった。

しかし、この強引な共産党のやりかたはウクライナ国内に大きな問題を引き起こした。1922年頃からウクライナ政府はロシア系住民を迫害し始めた。例えば、公の機関で働く人間にはロシア語の使用を禁じ、ウクライナ語のみとした。そうするとロシア語しか話せないロシア系住民は公の役所や工場から解雇されるようになる。ロシア系住民の多い東ウクライナにおいてもウクライナ人がいいポジションを独占し、ロシア語しか話せないロシア系の人間は貧しい境遇におかれてしまう。しかも1933年以降は学校でもロシア語の使用が禁止された。それ故1930年頃の時点で、西ウクライナ人と東ウクライナのロシア系住民との対立が起こっていた。つまり、1930年代からウクライナ国内での大きな問題になっていた。

第二次世界大戦の独ソ戦でウクライナが戦場になり、ドイツはハプスブルグ帝国が支配していたガリツィアという西ウクライナの地域を占領した。この時、ガリツィアのウクライナ人はナチスに協力してロシアと戦った。彼ら

のロシア嫌いというのは根が深く、ナチスに占領される前からロシア人が大嫌いだった。例えば、1914年第一次世界大戦が始まった時、当時のガリツィアはオーストリアが支配していた。オーストリア政府はガリツィアのウクライナ人と一緒になって、ロシア系住民、ロシア正教の神父、ロシアの味方をする言論人などを強制収容所に押し込み、数千人を虐殺した記録が残っている。そして、このガリツィア地方をウクライナに入れたのがスターリンだった。

前述した通り、レーニンはノヴォロシアのロシア系住民を無理やりウクライナに併合し、スターリンはガリツィアというロシア人を憎みまくっている地域をウクライナに編入した。このようにして出来上がった国がまともに機能するわけがなく、ウクライナを勝手に作り変えたレーニンとスターリンの罪は大きい。

ちなみに、現在ロシアはウクライナ東部の4州(ノヴォロシアと呼ばれていた地域)を武力で占領し、強引に併合しようとしているが、ロシアの領土だった地域を取り戻そうとするプーチンの執念が見られる。

今年に入ってからウクライナとロシアは消耗戦に入ってしまった、戦況はほとんど動いていない。欧米の主要メディアは、NATOがハイマースミサイルを供与し、ドイツはレオパルド戦車を持ち込み、イギリスはチャレンジャー戦車と巡航ミサイルを引き渡し、さらに強力な殺傷力を持つクラスター爆弾も持ち込まれたので、ウクライナは勝てるはずだと報道していた。しかし、実際には戦況を変えるような効果はなかった。

さらに主要メディアによると、来年はアメリカ製の戦闘機F-16が供与されるというが、アメリカが言っているのはせいぜい10機であり、デンマークとベルギーが夫々数機供与したとしても合計20機位、これでは戦況は変わらない。それをいかにもウクライナには勝つチャンスがあるような報道を

する欧米の主要メディアは間違っている。それを鵜呑みにする日本のメディアはなお悪い。

戦争が消耗戦になると武器弾薬と兵隊を多く持っている方が勝つことになる。現在のロシアとウクライナの軍事力を比較してみると、ロシアが圧倒的に有利である。軍事力は経済力と密接な関係にあるので、経済力(国内総生産)および人口を比較して見たい。

戦争が始まる前、ロシアの経済力はウクライナの10倍だった(10対1)。ところが戦争でウクライナの工業地帯はほとんど破壊されてしまい、今年の秋には15対1になっていた。そして、最近になってロシアはウクライナの公共施設と農業施設まで破壊しているので、現在では18対1。即ちウクライナ経済の生産力はロシアの18分の1になっている。このことは欧米の軍事援助がなければ、戦いは直ちに終わることを如実に物語っている。

次に、両国の人口について見てみる。戦争が始まる前、ロシアの人口とウクライナの人口の比率は3対1だった。しかし、現在は4対1になっている。これは戦争により多くのウクライナ人が難民として国外に出たことを表している。そうすると、ウクライナの戦争に駆り出せる人間はロシアの4分の1しかないということになる。

今年の3月、アメリカ政府はウクライナ戦争での戦死者と戦傷者(2度と戦場に出られなくなった人間)はロシアとウクライナほぼ同数であると発表した。ところが、アメリカ国防省の機密情報が若い兵士により暴露されるという事件が起きた。この機密情報によると、ウクライナの戦死者と戦傷者の数はロシアの5~7倍であるという。アメリカ政府は公の場ではほぼ同数と言ったが、内部資料には5~7倍となっている。ウクライナへ莫大な軍事援助をしている手前、具合の悪いことは隠したのだろう。



先に述べたように、ウクライナが戦争に駆り出せる人間はロシアの4分の1しかない。それなのに戦死者と戦傷者の数はロシアの5~7倍という。これはもう絶望的なことである。

ウクライナ戦争の特徴的なことは、戦死者の90%は大砲の打ち合いによって死んでいること。ミサイル、戦車、ドローンとかで死んでいるのは、わずか10%である。去年、ロシア軍が撃った大砲の弾とウクライナ軍が撃った大砲の弾を比較してみると、ウクライナ軍は調子のいい時にロシア軍の5分の1、調子の悪い時は10分の1しか撃てない。要するにロシア軍は5~10倍、弾を撃ち込んでいる。そうしたら、前述したウクライナの戦死者と戦傷者がロシアの5~7倍というのも理屈に合う。

とにかく、ロシア軍が撃ちこんでいる大砲の弾数は圧倒的に違う。消耗戦が続けば続くほどウクライナ軍の戦死者が増えることになる。欧米側は大砲の弾を至急増産すると言っているが、この計画がうまくいったとしてもロシア側は少なくとも3~4倍の弾をウクライナに撃ち込める。消耗戦をやっているかぎりウクライナの勝ち目はない。

昨年11月、アメリカ軍統合参謀本部議長のミリー陸軍大將が「ウクライナは勝てないから、停戦交渉をしたほうがいい」と発言して、ホワイトハウスの怒りをかった。しかし、ミリーは本当のことを言っている。このまま戦争を続けても状況は悪化するのみなのだが、ホワイトハウスと国務省は聞く耳を持たない。ホワイトハウスのバイデン大統領とサリバン安全保障担当補佐官、国務省のブリンケン長官とヌーランド副長官、この4人は停戦交渉を始めたら負けを認めたことになるので、絶対にそれは出来ないとしている。このままではずるずる来年の秋まで戦争を続けることになってしまう。

アメリカ政府は既に1100億ドルの軍事・経済援助をウクライナにしているが、今年8月、バイデン政権はさらに200億ドルを追加した。けれど

も、特に共和党の政治家達は援助はいい加減やめたほうがいいと主張している。おもな理由は「無駄な戦争は止める」ということであるが、その他にアメリカの援助が不正に使われているという疑惑がある。アメリカの3大テレビネットワークの一つ CBS の報道によると、アメリカが提供した 1100 億ドルの約半分はどこに行ったか分からない状態だと言う。

今年の3月、バーンズ CIA 長官がウクライナを訪問し、ゼレンスキー大統領と会談した。その時バーンズは 35~40 名のブラックリストをゼレンスキーに示したという情報がある。元 CIA のロシア担当官だったジラルディによると、援助を不正に使っていると見られる人名のリストに、ゼレンスキーの名前もあったとされている。

ウクライナ政府の腐敗はこれまでも種々のメディアに指摘されて来たが、援助が盗まれている疑惑はさらに深まった。正義の戦いだと声高に叫び、他国の援助を頼りに戦ってきたウクライナがこの有様では、欧米の支援も無くなるであろう。

## ルーラ政権の腐敗

サンパウロ 9期 貝田定夫

中年の女性がブラジリアの法務省を訪れ、法務大臣の補佐官に面会した。彼女は手厚いもてなしのうえ、ブラジリアまでの交通費と滞在費まで払ってもらった。しかし、今回が始めてではなく、これまで度々会っていたようである。このことが外部に漏れ、彼女が凶悪犯罪者の妻であることが知れると大騒ぎになった。

女性の名はルシアネといい、アマゾナス州の町で美容院を経営している。地元では“Dama do Tráfico”(闇の貴婦人)と呼ばれよく知られている。彼女の夫はクレミルソンといい、犯罪組織(Comando Vermelho)の首領だが現在は麻薬密売の罪で服役中。アマゾナス地方の警察は、クレミルソンを数多くの殺人事件の首謀者と見ている。非常に残忍な男で、殺した人間の顔に自分の

マークを刻み込んだりして恐れることがない。また、飛行機さえも撃ち落とせる重火器を持っている写真を見せびらかしていた。凶暴な悪人である。

ルシアネも犯罪組織の一員であって、夫の片腕として働き美容院は隠れみのとして使っている。彼女は以前、資金洗浄の罪で起訴されたことがあり、警察は彼女の動きに目を光らせている。また、ルシアネは政府の要人の他に左翼の国会議員達とも連携しており、夫の釈放を狙っているものと見られる。麻薬の密売で得た資金は十分にあるのだろう。

野党議員達の猛攻撃にあい、政府はルシアネに交通費と滞在費を払ったことを認めた。その言い訳が面白いので紹介したい。

人権・公民権担当省(Ministério dos Direitos Humanos e da Cidadania)の発表を要約すると、「拷問防止委員会が11月6日と7日に開かれ、参加者に対して委員会の予算の中から費用が支払われた」、と苦し紛れの弁解をしている。おまけに出席者の中にルシアネがいたのは知らなかった、ととぼけている。拷問防止委員会なるものの存在も疑わしい。

政府の下手な言い訳はともかく、問題は政府の役人達が麻薬密売人という関係を作り、便宜を計った見返りにワイロをもらうことである。

野党連合は法務大臣のジーノと人権担当大臣アルメイダの国会召喚を決め、徹底的に闘う構えを見せている。アルメイダに対しては大臣の「クビ」を要求している。ジーノは太った男で見るからに悪そうな顔をしていて、「今回の件では誰もクビにしない」と公言してはばからない。法務大臣がこの有様ではあきれてものが言えない。これを親分のルーラがかばっている。泥棒の大統領とならず者の法務大臣、「悪人コンビ」がブラジルを崩壊させる。



南青協月間会計報告 (9 月分)

2023 年 9 月 30 日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	8 月よりの繰越分			32.898,92
11/Set	年会費 10 期平島征也氏(276)		200,00	
16/Set	慰霊祭用線香ローソク	65,90		
16/Set	慰霊祭花	19,80		
17/Set	慰霊祭飲み物	128,45		
17/Set	年会費 1 次磯中晴子氏(01)		200,00	
17/Set	慰霊祭法要	1.320,00		
26/Set	会報 223 号 Copia	1.207,50		
	会報 223 号 Correio	710,97		
	Rendimento		191,07	
	<b>Total</b>	<b>3.452,62</b>	<b>591,07</b>	<b>30.037,37</b>

<p><i>Bradesco の支店番号と口座番号</i>  <i>Extrato Conta Corrente</i>  <i>Takatoshi Osada</i>  <i>Agência 1480</i>  <i>Conta 0033226-7</i>  <i>Disp.P / Poupança</i></p>		<p><i>Agência 1480</i>  <i>Conta 33226-7</i>  <i>Takatoshi Osada</i>  <i>CPF 698.506.588-00</i>  <i>CEP 04371-000</i></p>
<b>Saldo Total</b>	<b>30.037,37</b>	<p><i>Cheque の送り先</i>  <i>Takatoshi Osada</i>  <i>Rua Rishin Matsuda, 467</i>  <i>Vi. Sta. Catarina</i>  <i>Jabaquara - SP</i></p>



# 南青協月間会計報告 (10 月分)

2023 年 10 月 31 日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	9 月よりの繰越分			30.037,37
30/Out	年会費 2 次三沢貞夫氏 (21)		200,00	
	Rendimento		182,12	
	Total	0	382,12	30.419,49

<p><i>Bradesco の支店番号と口座番号</i>  <i>Extrato Conta Corrente</i>  <i>Takatoshi Osada</i>  <i>Agência 1480</i>  <i>Conta 0033226-7</i>  <i>Disp.P / Poupança</i></p>	<p>Saldo Total</p>	<p>30.419,49</p>	<p><i>Agência 1480</i>  <i>Conta 33226-7</i>  <i>Takatoshi Osada</i>  <i>CPF 698.506.588-00</i>  <i>CEP 04371-000</i></p> <p><i>Cheque の送り先</i>  <i>Takatoshi Osada</i>  <i>Rua Rishin Matsuda, 467</i>  <i>Vi. Sta. Catarina</i>  <i>Jabaquara - SP</i></p>
---	--------------------	------------------	--



富士宮市北西部から見た割れ目がある富士山。この割れ目は徐々に成長しているとのこと。ここからは南側にある宝永山は見えません。11月28日撮影



「よっちゃん」は仕事がとても調子良かったのにも関わらず、どうしてポルトガルに行ったのか？とブラジルに遊びに来る度に聞かれるので、それではどうしてポルトガルに行ったのか、その理由を書こうと思ったのですが、長い自分史になってしまった。

さて結婚式も無事に終えて、新しい伴侶と共に再びブラジルへの帰国を迎えました。だが彼女にとっては初めての旅でした。それは45日間の長い船旅でした。

「よっちゃん」にとっては二回目の船旅で、今回はアルゼンチナ丸の貨客船である。最初に1964年に乗った最後の移住船はカイコ棚と言われていた寢床と違ってこの船は、各部屋は個室になっていて、本来は二人用または4人用となっていたが、残念ながら四人用に割り当てられました。

相部屋の人は70歳くらいの御夫婦で、サンパウロの町のピネイロスのメルカードで商売していたそうで、あの頃500万円持って日本に行ったが、使いきれなかったと言って笑っていた。とても親切なご夫婦で我々の新婚さんにとっても気を使っていました。

船旅では時間があり過ぎるので、本を読むのが好きな「よっちゃん」は長編小説を読むのに挑戦した。その第一の本は吉川英治の三国志で非常に興味を持って夢中で読んだ記憶がある。吉川英治の小説「三国志」は、中国後漢末期から三国時代を舞台にした歴史小説です。1939年から1943年にかけて新聞連載され、単行本も多くの版で刊行され、絶大な人気を博しています。

物語は、後漢末期の乱世に、劉備、曹操、孫権という三人の英雄が天下統一を目指して戦う様子を描いています。劉備は理想主義的な英雄、曹操は冷酷で野心的な策士、孫権は政治的な手腕に長けたリーダーです。

三人はそれぞれ異なる個性と才能を持ち、天下統一のために激しく争い合います。小説では、三人の英雄の活躍だけでなく、魏、蜀、呉の三国間の戦い、そしてその裏で、繰り広げられている人間ドラマにとっても興味を持ったものです。

劉備、曹操、孫権という三人の英雄は歴史小説としてだけでなく、人間ドラマとしても多くの読者の心を捉え、劉備の理想と信念それを支える軍師である超有名な諸葛亮孔明の知略に長け、劉備の天下統一を支えた人間ドラマが描かれていました。

又曹操の野心と才覚、孫権の政治的手腕、そして彼らを取り巻く人々の生き様特に生きることの意味や人生の真実を問いかけてくれたものです。「三国志」は、日本のみならず、世界中で愛読されている作品です。中国では、吉川英治の「三国志」は、中国の四大名著の一つ「三国志演義」に並ぶ名作として、広く親しまれているそうです。

又とても感動した小説家である司馬 遼太郎は、日本の小説家、ノンフィクション作家、評論家。筆名の由来は「司馬遷に遼に及ばざる日本の者」からきている。大阪府大阪市出身。産経新聞社記者として在職中に、『梟の城』で直木賞を受賞。歴史小説に新風を送る。

特に長編小説『竜馬が行く』は、幕末の動乱期を駆け抜けた坂本龍馬の生涯を描いた歴史小説で、封建体制の打破と明治維新への道を開くために活動した。この小説では、龍馬の青年期から暗殺されるまでの短い生涯が描かれています。

物語は龍馬が土佐藩以下級武士として生まれ、狭い枠組みを超えて広い視野を持ち、新しい時代を構築しようとする姿を描きます。し、日本初の商社を設立するなど、商人としても革新的な活動を行いました。また、龍馬は倒幕派としても活躍し、薩長同盟を成立させるなど、維新の立役者の一人となります。その影響力が限りなくあり、多くの敵を作り、最終的には暗殺されてしまいます。

そして彼が最も影響を受けた師は吉田松陰（1830年 - 1859年）です。松陰は江戸時代末期（幕末）の思想家、教育者であり、革命家としても知られていて、多くの若者たちに学問を教え、その後の明治維新に多大な影響を与えました。松陰の思想は、日本の独立と自主性の確立を強く主張して、地化されることを最も恐れ、国力の確保と国民の啓蒙を促した。

1854年、ペリー来航に伴う日米和親条約の締結に反対し、自らも武力による攘夷を試みましたが失敗。刑務所に投獄されます。投獄中も多くの文章を書き、その考えは広く伝播しました。

陰門下からは、明治維新の主要人物である高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋、久坂瑞玄などが出ており、彼らは松陰の教えを胸に、日本の近代化と明治維新に向けて活動を行っている松陰は、安政の大刑務所により処刑されますが、その熱意と考えは多くの人々に受け継がれ、日本の歴史にとって重要な役割を果たされています。

松陰曰く

夢なき者に理想なし、  
理想なき者に計画なし、  
計画なき者に実行なし、  
実行なき者に成功なし。  
故に、夢なき者に成功なし。

「よっちゃん」はこれを座右の銘としています。ぜひ皆さんの中でまだ読んでいない人は是非読んでみたい者ですね、若返りますよ、本当に！  
長い船旅も終え無事にリオデジャネイロの港に八月の某日に着いた。八月と言えば日本では夏の真っ最中で結構暑いですが、リオの場合は南半球なので日本とは反対の気候である、着いたその日はとても寒く、寝るのには毛布が必要なくらいでした。



長い船旅であったが妻の順子はすでに妊娠して、船旅はつわりが酷かったみたいでした。ニテロイ市のセントロ（中央）の大通りの我が家の小さなアパートである。今考えればよく我慢したな～と思っているほどちっぽけな所である。

彼女はあの時、心に中ではどう思っていたかは分からないが、調子のいい事を言って着いた所はなあんだこんなむさ苦しい小さい所で、これから生活していくのかと思うと泣けてナケテ、しょうがなかったと思うよ。その内にあの当時の事を聞いてみようと思う。

さてアパートと言っても小さな部屋と居間が一緒に仕切りがない、カーテンで仕切っていた。その小さな部屋に二人の日系の弟子が寝ており、居間にはベッドにもなる長椅子があっただけで、コジーニャ（台所）はやっと一人が入れて、普通の4ボッカのホルノは大きくて入らないので、3ボッカの小さいホルノで我慢して生活が始まった。

でもこれもしばらくの間で、そこからオニブス（バス）で40分ぐらいの所にあるサンゴンサーロという町に小さいけれど中古の家を買って、へホルマ（改造）しているのもう少しの辛抱を願った。

所がこの小さなアパートの台所はバラッタが多く、それも2～3センチもあるやつだ。殺してもころしても外から入ってくるのだからしょうがない。油断すると台所の入り口のへりに卵を20～30個も産んでいくのには呆れてしまう。バラッタと戦争している生活だった。

何だかんだと時間が過ぎて、いよいよサンゴンサーロの我が家に引っ越ししてきた。と言っても古い家で居間に二部屋で台所は広かった。庭付きで後ろには物置みたいな家が有り、そこを修理してお手伝いさんが寝られるようにした。お手伝いさんと言っても18歳位の若い子で男にモテそうなクリクリした顔を持っていたが、これがくせものだ。

ここの生活も悪くはなかったが、残念ながらこの辺はラドロソ（コソ泥某）が多くてね。結構留守の間にチョコット台所に来て何かしらを持っていく。中には堂々として「よっちゃん」が留守の時に恰幅の良いブラジル人が尋ねてきて、家内の順子に言わせれば、あなたのご主人がステレオプレイヤーを持ってきてくれと頼まれた。

ビクター製の日本から持ってきたプレイヤーを渡してしまった。そのプレイヤーは日本の50サイクル用で此処の場所は60サイクルなので音が変なのであった。だから主人が修理に出そうと言ったのを思い出して泥棒に渡したということです。その頃は随分と新日本人がカメラとか結構高い物が狙われていた時期でもあった。

でも家の右隣の若奥さん（クレアといった）はとても順子を可愛がって、アジュウダ（手伝い）してくれていた。妊娠しているのを心配していたのである。又向かいのおばちゃんもよくしてくれたものだ。

家の左側は広いカンポ（空き地）があって近所の子供達がフッチボールをしているがいつもそのボールが家にぶつかったり、窓ガラスを壊したりして困ったものである。そしてゴミを捨てていくので “此処にゴミを捨てるな” と小さい看板を建てても平気でゴミを捨てていくのには参ったね。社会道德の問題だ。

そうこうしているうちに長男広志が無事産まれました、1971年でした。この広大なブラジルに大きな志を抱いて活躍してくれとの親の思いを持ってつけた名前が広志だったのです。現在（2023年）彼はクリニカジェラル（一般内科）として活躍している既婚、二人の父親です。

翌年には次男の龍太郎が産まれた。太郎という名前は長男に付ける名前です。次男には龍次郎とすべきだと言われた事があるが、そう言えばそうですよね。でも現在（2023年）は結婚し、3人の子供の親で「よっちゃん」の後

継で治療に専念している。その息子の次男が（「よっちゃん」の孫）やはり治療師の道に入って一緒に仕事をしている。

仕事も順調に行きだし、お金も入ってきたので憧れのコパカバーナに支店を開いた。そうすると私を弟子にしてくれという輩が出て来て、最初は日本人でしたが彼等たちは仕事を覚えると、さっさと止めて自分で治療所を開いていく。一緒に頑張っていこうという気はなく、単なる利用しているに過ぎない。

勿論誰でもお金は欲しいし、一人でやれば稼いだお金はみんな自分の物になるのだから、その気持ちは十分にわかります。でも「よっちゃん」は気にしないで “来るものは拒まず、去る者は追わず” の精神でやっているの、別に構わないし、彼等たちの繁盛を祈るだけです。

その内にパラナの田舎の日系青年が指圧を覚えたいと友達の紹介で来た。これがきっかけで八人の青年が「よっちゃん」の家に寝泊まりして、修業を始めたのです。

その頃はサンゴンサーロの家からニテロイ市に移って来たのです。あそこからコパカバーナの支店に行くにはオニブス（バス）で40分掛かり、リオの町に渡し船で20分掛けて渡り、そこから又オニブスでコパカバーナの支店に行くのにさらに40分位かかるので、兎も角通勤に2時間はかかるのです。

帰って来るのは夜の9時過ぎになってしまうので、子供が寝ている間に出かけ子供が夜寝ている時に帰って来るので、まともに子供の顔が見られなかったものです。だから出かけるのは朝の5時半に出かけるが、女房が弁当を作ってくれるので彼女は4時半に起きて支度をしてくれる。あの頃はそんな状況でした。

つづく



9月17日の慰霊祭に参加して来ました。

今度引っ越した私の住むジュンジアイー市はサンパウロ市から60kmの近さなので、この町に住む息子の運転で、9月17日の我々の青年隊慰霊祭に参加してブラジル金閣寺、円光寺を拝見し参拝をして来ました。

私達9期生がブラジルに着いたのは1963年8月15日にサントス着でしたので、丁度60年のブラジル暮らしとなったので、やはり慰霊祭に来られていた同期の津田浦之助さんとコップを交わして青年隊員として続いた9期生の60年還暦を祝いました。

以前から青年隊慰霊碑の場所は聞いていたのですが、今回行って見て大変驚いたのは、広大なブラジルの広地の一面に建っている金閣寺、円光寺それに青年隊慰霊塔とっていましたが、山間を曲がりくねった道路に沿った山間の一面に建つ金閣寺と隣接して建つ円光寺で、また前の池には大きな錦鯉が泳いでいて、この忘れていた日本古風の雰囲気ですっかり目を奪われて感激しました。

ネットで調べましたらこの金閣寺をブラジルに造るアイデアは15年ほど日本に住んだ退役アメリカ軍人で、建築は日系ブラジル人の宮大工、材量は全部ブラジル国内で調達し、約8年をかけて1976年に完成されたそうです。

しかし金閣寺は納骨を受けるだけなので、寺院が必要と感じ住職となった大畑天昇氏（1920年－2017年）が円光寺を1991年から2001年に建設し、2017年に亡くなるまで法事とか納灰法要などの仏事を続けました。

円光寺は仏教の曹洞宗を続けている寺院で、今回集まって下さった皆さんに、ブラジル人のお坊さんでしたが木魚とカネをたたいて読経を上げて下さ

いました。その読経と木魚とカネの音を聞いて、私がまだ東京で働いて居た  
当時に母が亡くなり、父が位牌の前で毎朝木魚とカネをたたいて、お経をあ  
げていたのを思い出し、日本での過ぎ去った過去を思い、大変懐かしく拝聴  
し焼香しました。

日本の仏教には十数派があり、この円光寺は曹洞宗だそうで、調べました  
ら私の生地のお寺龍源寺も同じ曹洞宗なのでその偶然の一致にも驚きまし  
た。

その後皆さん一緒に食事を済まして、雑談をしていましたが、背の高い人  
が家族と一緒にいたので、貴方はどなたかの青年隊員の息子さんですかと聞  
いたら、私は磯中の息子です、と言うので青年隊名簿にある第1次でナンバ  
ー1の磯中雄二さんの息子さんと知り、少し言葉を交わしましたが又また驚  
きの続きでした。私は磯中さんとは実際に会った事はありませんでしたが、  
1次隊員の黒木さん、安摩さんそれにカラグアタツバの武藤さんなどには  
お世話になった思い出があります。

慰霊祭には他にも数名の婦人達でしたが、やはり青年隊と言う言葉を  
忘れられなく会合に出て来られたと思いますので、これからは益々減って行  
く隊員なので残った我々は機会を利用して、思い出を語り合う会合になれば  
と思います。

慰霊祭を企画された皆さん、良い思い出となりありがとうございました。



長田さん

長らくご無沙汰致し申し訳ありません。過日お便り有難う御座いました。今年8月には滞在移住証明書を取得するため総領事館に行き、貴家を訪問する予定でしたがサンパウロ市内をあちら此方訪問していたら、足に酷い痙攣を覚え歩けなくなりました。それで、貴家へ行くと返ってご迷惑を掛けると思い断念しました。

10月3日南青協便り223号を受け取り、早速読んで行くうちに、志方進氏の送別会の記事が載っていてびっくりしました。志方氏も良く色々の事を連絡してくれる人ですが、このたびは何の連絡もありませんでした。

しかし送別会は楽しい雰囲気の様子が出ていて本当に良かったと思います。しかし今後機関紙発行がもっと大変に成るのではないかと心配に成ります。仲間の皆が年寄りに成って来て8期生としては私が一番の年輩者になったようです。しかし「光陰矢の如し」であります。この年に成ると何時この世を去るか分かりません。

小山徳さんともサンパウロに出た時は何時も会っていましたが、もう会えません。人生の歳月は本当に短いものです。

しかし私はブラジルに来て本当に幸せでした。何故なら真の生きる神に出会い、永遠の希望を持って生きるものと変えられたからです。物質や対人関係は人生の幸せにとって大切な物ですが、それ以上に大切な物は万物の造り主、全人類の造り主なる神を知り信じ、そのお恵みとお救いに依り神を天の父なる主になられたからです。私は以前神なるお方は居られるのでしょうか、居られないのでしょうか分かりませんでした。

しかし聖書を戴いて読み、6年位して真の生きる神を知り、信じ受け入れ、そのお救いに預かり、私自身が良い意味で変えられました。神は自存者で永遠に人々をお守りに成ります。

原稿の締め切りが近付いたので以下は次号にいたします。





私の四女ヒトミの家族は今カナダのトロント市に住んでいます。ヒトミの夫（井上）はカナダ資本のスコッチア銀行サンパウロ支店に入社し15年程働き後にメキシコ支店に移り3年程働き、2年前にカナダの本店勤務になり、一年間は子供の学校が学年末だったので、独身勤務で過ごし、その後家族を呼び寄せて丸1年が経過しました。

私はカナダについてはアメリカ合衆国の北部に位置し、広大なツンドラ地帯の寒い森林大国位の知識しかありませんでした。カナダは鉱物資源大国で北米合衆国の技術がスナリ入り、国民人口は少ないけどアメリカ以上に個人所得は高く庶民は裕福です。

開国時から英国人とフランス人が旨く調和した国だと思いました。国語は英語ですが、商品名などは全て英語とフランス語で記されています。庶民は温厚でアメリカ人に比べたらより素直だと感じました。

日本人は少なく中国人は沢山います。日本語で書かれたラーメン店に入ってもカツドン定食店に入っても、店主は中国人です。トロントにもチャイナタウンはありますが、ニューヨークやサンフランシスコのチャイナタウンとは違い整然としています。

街中を走る車はトヨタ、ホンダ車が圧倒的に多く、GM, フォード、ニッサン、スバル、マツダが優位でワゴン車は少なくフィアットとフランスのルノー社の車は殆ど見掛けません。道路は広く全体的にサンパウロに比べたら北米同様大型車が圧倒的に多い。

住宅は同じ区画は全て同じ形の住宅で勝手に変えることは許されません。二人の子供のカナダでの学校も無事に一年過ぎたので、ヒトミから一度サンパウロから遊びに来ないかと誘われる。それではと旅行好きの次女夫婦が9月中旬に行こうかと私と女房を誘う。私も足の痛みも何とか調整出来た様なので、行って見ようかと答える。

私の旅券のビザは2026年迄有効でしたが、女房の方は既に切れていて、新しく申請しても半年掛かると言われ、私と次女夫婦3人で行く事にな

る。次女ヒロミの夫は9月の気候が一番穏やかなので9月中旬にしようと言いました。

私は日本にいた頃は紅葉狩りをするほど風流な気持ちはありませんでした。私の家の隣のモミジが奇麗に染まったのや学校の校庭の隅に植えられた2本のイチョウが奇麗な黄色に染まったのを見て美しく思ったくらいだけでした。

次女の夫のミーハに9月の中旬にカナダに行こうと言われ、私はカナダの国旗の中央部に描かれている赤いカエデの葉を思い出し、カナダは確か秋の紅葉が素晴らしいと思い、9月の中旬より10月の中旬が良い筈だと言って10月16日から10月の30日に決定しました。

サンパウロからトロント行き直行便は大西洋上をトロントに向け北上して飛行時間は9時間です。ヒロミが住んでいるのはトロント市から少し離れたオークヴィレ(Oakville)市です。オークヴィレ市は5大湖の内で一番小さいオンタリオ湖の湖畔のリゾート市です。

ヒロミはカナダに来て1年少しですが、働いています。仕事は大きな小学校の一年生の朝の受け入れと午後の送り出しエキープです。この火曜日と水曜日は我々の迎え入れの為に休暇を取りました。到着当日は荷物整理と午後は家から200メートル程の直ぐ近くの公園を散歩しました。この付近の小川の低くみの多くは小さな自然公園になっています。

ヒロミが住んでいる地域は全くの静かな住宅街で近くにはパダリヤ（パン屋さん）も有りません。

区域の住宅街の家は全て同じ造りの家でサンパウロの様に勝手に自分の好みの家を造る事は許されません。我々から見たら不思議な事ほどの家にも屋内の車の車庫は有りますが、家の外に駐車します。誰もが自分の家の前に木を植えています。その住宅街の木々の並木が丁度今赤、黄色に紅葉して見事なものです。これがカナダの紅葉なのだと思います。時期としたら10月の初めから11月中旬ですが、我々は調度良い時に来ました。奇麗に紅葉した多種類のカエデの紅葉を見た時は最高の驚きでした。その翌日はヒロミが案内して然程遠くない川べりの公園に行きました。



上の写真はヒトミの隣の家の赤く染まったカエデの紅葉です。

このオンタリオ湖の周辺には沢山の川が流れ込みます。サンパウロでは川の両岸はファベイラと決まったものですが、このオンタリオ湖周辺の町にはファベイラは皆無です。

ヒトミが案内した公園の川は少し大きく大きな石もごろごろしていて川底は浅く子砂利でした。密林のような公園内に入ると木々の黄葉の反射で森林の中が明るく照らされました。これがカナダの黄葉だと思いました。

川原の瀬に大瀬の人が集っているので川の岸边に下りていくと沢山の鮭の群れが泳いでいるのではないですか。ヒトミは前に来た時は春と夏の時期で鮭が川を遡上して来る事は知らなかったもので、案内する本人も大変驚いていました。

その鮭の群れの殆どが雌と雄のカップルで産卵と受精の準備の段階でした。大きな雌鮭は10キロ位あります。尻尾と背鰭が白く変色した雄もあり、雌鮭も雄鮭も彼等の最後の仕事だと思い悲しく思いました。鮭の群れは命を賭けた最後の仕事に懸命でした。その川の岸边近くに大きな鮭の死に骸が身体を半分水の外にさらしていましたが、水温と気温が低いので死臭は感じませんでした。





写真の手前の雄の尻尾と背びれは白い死斑が現れています。



この写真はヒトミの家の直ぐ近くの公園です。

金曜日はトロント市に行き島に行く船に乗って、トロント市の中心街の全景が写せる場所に座り、トロント市の中心部の写真を撮りました。島の芝生の公園で弁当を食べていると、どうも感じが日本のイチョウらしき木が植えられていて、ギンナの実が落ちている。落ちたばかりの綺麗な実を拾い集めました。今家に帰りギンナの超冬準備の為に冷蔵庫に保管しています。1月には蒔いてやろうと思っています。果たして旨く芽を出してくれるかです。





写真はトロント市の中心街と Latour Tower (5 5 3MT)



見事な黄葉の前で次女とヒトミと孫の直巳

旅行中日の土曜日は井上家族四人と我々三人でトロントの名物タワーに登頂予約されました。このタワーはと東京タワーの直ぐ後に完成し、東京の新タワーが完成するまで長い間世界一の名タワーと言われました。

カナダの首都はオタワですが現在のカナダの経済の中心はトロントです。人口は300万ですが、カナダの総人口の割の大都会です。中心部はニューヨークのマンハッタンのように60階の高層ビルの立ち並ぶ近代都市です。その中心部に立つラアツールタワーは街の中心的な存在です。

タワーの遊覧観光席は上階の席でテーブルと椅子付きで、その階は1時間に一回転し、食事が終わると又同じ位置に戻ります。その食堂観覧席は暖房が効いて気持ちが良い。食事の後下の一般観覧席に降りると大勢の人が飲み物を持って立ち食いで食事をしている。

日曜日はナイヤガラ瀑布に出掛ける。ナイヤガラ瀑布は五大湖の内4湖はほぼ同じ高低で最後の一つのオンタリオ湖とは90メートルの高低差があり、ナイヤガラ瀑布が出来たのです。五大湖の境界線のほぼ半分はアメリカ合衆国とカナダで分け合っています。ナイヤガラ瀑布も滝の中間が境界線です。滝の高さは25メートル程で半円形の滝に付随してもう一つの滝がアメリカ側に有ります。五大湖の湖は海のように広大で水は海水のように青々としています。物凄く大量の青い水が飛沫を上げて落ちる様は此の世のいかなる物も飲み込んでしまうと思われます。ニューヨークからもシカゴからもトロントからも近いので大勢の観光客が押し寄せます。滝を見下ろすカナダ側には沢山の高層ビルホテルが有り、その一つはカジノです。カナダ側は地の利を得て毎日滝見物人が押し寄せます。



ナイヤガラ瀑布は青い滝です。



旅行2週間位前のブラジル日報の記事に日本人女性がナイヤガラ瀑布から投身自殺をしたと見たので、何処から飛び込んだか眺めると、カナダ側にはその手掛りは無いのでアメリカ側の滝だと見ました。

私の家には収穫3年目を迎えるニヤガラ葡萄が今青々と実っています。昨年はクリスマスと正月に熟れましたが今年は少し早くなり、収穫量も30キロ位予想しています。大変甘いので今から楽しみにしています。

我が家の葡萄の原産地はナイヤガラ地方です。ナイヤガラ瀑布観光から帰り道には沢山の果樹園があり時に葡萄園が沢山有りました。ぶどう酒醸造工場も沢山有り、2~3本買って来ました。

トロント地方の公園内にはブドウの蔓が沢山見かけます。私たちが滞在中にも大霜が2回降りました。11月より4ヶ月は寒いので我々には無理です。学校の夏休みは2ヶ月で冬休みは2週間で人人は夏を湖畔の家で大いに楽しみたいようです。カナダ人はアメリカ人に比べて大変穏やかです。日本製の車は圧倒的に多いけど、日本人は殆ど見掛けません。中国人は沢山います。



私は南米産業開発青年隊6期生であります。

同期生には同郷の盆子原国彦氏、鈴木源治氏など居りましたが、ブラジル向けに1960年8月、横浜港から総勢44名の青年達がアルゼンチナ丸に同乗して「海外雄飛」を志して出航。延々48日間の長旅の末、目的港のサントスに到着。

其処から汽車に乗りパラナ州のマリンガ市まで約二日罹りで到着、その町の日本人会の御世話で朝食・昼食・夜食を賜り、その夜、私と同期の元自衛官遠藤氏の二人はマリンガ市内の街に出掛けて（当時はまだ市内には電灯も無く）真っ暗な街中で大型雑貨屋を見つけて入店。

その店の店員に拙いポルトガル語で「拳銃は有るか？」と。其の返事は「シン・セニョール」。ワシ等は色々な銃器を見せられて、遠藤氏は単発二連銃、ワシは小型25口径の5連発銃と銃弾百個を購入した。

まさか斯様に簡単に銃器が「購入」出来るとは！ 50米ドルで購入出来た。早速に宿泊地に戻り毛布をかぶり眠りについたが、その夜は随分と「興奮！」していたから、殆ど眠れず、早朝の出発。全員の荷物を満載した大型トラックの荷台に乗る。

マリンガからパラナ州西部にドンドンとマツトの中を進み、夕刻遅くに「青年隊訓練所」に到着。横浜を出て52日振りに目的地に到着出来た。酷い奥地であった。

まだ大勢の先輩隊員（50～60名）が「訓練中？」らしく、イヤハヤ此の奥地に全くポルトガルの話せないウラ若い日本人が100名以上も住むことになった。

当時の「隊長」は進藤氏（当時は30歳～35歳？）で、我々青年隊を取仕切っていて、新着の40名を如何に「指導？」するかをアレコレ考慮していたらしい。

ワシ等新隊員達は何がしたかったかは、ほぼ全員誰も判らなかつたから毎朝起きて飯を喰ったら、其々が「着替えて」其の日の「仕事」の作業場にゾロゾロと出掛けて、其処の作業場長（先輩）の指示で畑仕事（草取り・畝作り）、綿畑では「綿採り」、大工仕事では「小屋造り」等々と自分が気に入った「仕事」をした。

ワシ等が日本で期待していた土木技術作業等は「期待できず」、此処で毎日暇潰し作業していたら、4か月後にはブラジル奥地でワシ等は山奥の山男に？ 此処はヒトツ「大都会サンパウロ市に出て」とアレコレ色々の人々と語り合い、ナニか自分の望みに近づく筈！とか何とか。「隊長。遠藤氏」に「斯く斯く然然！」と尤もらしい理由を付けて言い、イザ！サンパウロへ。

サンパウロに出て、アラアラ！日本人街の「安宿」に泊まり、其の街中の映画館「松竹」「大映」「新東宝」の映画館巡りして遊び暮らした。この街に「先輩宿」が有り、5～6名の先輩たちは其々個人・二人組・三人組が街のフェイランテ（露天商）で稼いでいた。フーンそれもヨカネ！

後学の為に我々も早朝に各先輩の跡について行き、先輩たちの「商売？」状況を見物した。露店商とは1週間に6日間、毎日違った街路の両側に決められた露店台で諸々の商品の販売をする。

日用品では食料品（野菜類・トマト・バタタ・果物・玉子・米・メリケン粉など）を先輩達が売っていた。観ていれば、我々より1年先輩たちは早くも堂々と「お客さん」相手にポルトガル語で遣り取りしている。

訊けば言葉は「学校で学ぶより」現場で「慣れれば」自然と諸々の言葉を覚えるヨ！」ソウカ「習うより慣れろ！」と言う事らしい。ワシも徐々に判り始めた。

サンパウロでペンション住まいする内にボチボチ「懐具合が淋しくなり始めた頃に」コチア産組の傘下の農拓協の久万組合長から誰か一寸「来い！」と言う話でワシは「ハイハイ・ナンですか？」と尋ねたら「ジャミック・JAMIC」（公社）に行かないか？ と云う相談であった。

その年の暮れから日本政府・農林省管轄の「移住地造成」計画が発表されて、ブラジル移住協会との協賛事業として、サンパウロ州北西部での「グアタパラ移住地造成工事」が日本の7県の参加で決まったとか。

各県（7県）から土木技術者が来泊して来るとかで、其れ等技術者達の「助手」として産業開発青年隊の土木技術者を7名募集すると謂う。

ワシはすぐにサンパウロ市内の「JAMIC」に出掛けてその話を聴く。其処には日本人職員ばかりが10名以上居て、どうも日本政府・農林省派遣の役人らしき面々が揃っていた。

話に依れば、「土木技術者・助士」を10名募集したい云々。ワシに其の募集を「任せる」と云うから、考えるフリをして「判りました。私が土木技術助士を集めましょう」。

グアタパラ移住地は明治40年代に日本人移住地として当時の日本政府が日本各地の「貧農者」達に「ブラジル・サンパウロ奥地のグアタパラ移住地への入植者大募集！」として、当時の貧農者・次男・三男に家族移住を宣伝した。

当時、移住する家族の「渡航費」は全て日本政府が「負担！」。その宣伝文句に大勢の貧農家族が参加したらしい。

第一便で其処に入植した移住者たちは其処の低地に水田を開いたらしく入植早々から、伝染病のマラリアがブラジル全地で流行していたので、次々マラリアに罹り、一陣300名中半分の人達はマラリア病で亡くなったらしい。日本政府は直ちに、第二陣の「入植」を止めて当分ブラジル移住を止めたとか。亡くなった移住者たちの生き残り移住者達は当時の日本政府宛に厳しい「政府弁済」を求めたが、当時の日本政府は、ナニも云わず黙して語らず。

其の50年後に世界中のマラリアは絶滅されて「皆無！」とされている。

このグアタパラをヒョイと思い出した様に、日本政府はここを「日本人移住者用地」として、改めて「開発しましょう！」（昔の事は忘れましょう？）

早速、ワシは訓練所に返り、遠藤隊長に斯く斯く然々と説明して、食堂で「会議」を開いた。雇用先は半官半民の「JAMIC」で、職種としては「日本から派遣された土木技術者の助手」。

当時キャンプには7期生40数名が溢れていた。希望者を募ったら、最初は2～3名だったけれど、その夜に彼等とイロイロ話合っているうちに、参加希望者はみるみる増えて行く。

ヨーク考えて呉れよ！ 君たちはワザワザ「南米ブラジル迄、月給取りになる夢を見たのか？」と一寸ヤヤコシイ質問をした。

本来、ワシ自身もサラリーマンを夢見て南米くんだりまで「来たわけでもない！」ワシの場合は取り敢えず日本を出て、何処でも良いから外国の地を「観て回る」事がワシの「夢」だっただけだ。

翌日、ワシは大凡の頭数を決めてJAMICに還った。

ジャミックの所長は「白石健二」氏で台湾東大卒の日本陸軍台湾連隊中隊長卒の元陸軍大尉さんであった。

我々戦後派の青年隊員などは、所長の眼で視れば小生意気な「兵卒？」程度にしか見えならしく。ワシはこの人とは全く肌が合わなかった。

偶々ワシの苗字が二文字で「ミト」と呼びやすかったらしく、ナニか有ると大声で「ミト！一寸来い！」と呼びつける。

最初は「へイ！」と返事をして顔を出すと机の埃を拭け！ と言う、ナニもワザワザワシを呼びつける事も有るまい！

その調子で、なにか有れば「オーイ、ミト」と大声で呼びつける。

他に暇人はアチコチに居ても。何故かワシを呼びつけようとする。この元大尉殿はワシを大尉付き「兵卒」と勘違いシテいる節もあった。

儂も少々面倒臭いから、時折、呼ばれても「聞こえぬフリをして知らん顔」していたら大尉の近辺に居る他の者にオーイ！ミトを呼んで来い！と。命令を受けた者はワシを見つけたら、オーイ！所長があんた捜しているぞ！と言う。

ガタパラ移住地に日本の7県からボチボチ移住者達が「入植」して来た。其れ等移住者たちは此処の移住地は十分に住み易い「植民地」ではあったが、青年隊隊員達は此の移住者達の家族と親しくなって、其処の娘と仲良しになって、次々と此の移住地で「結婚」して行く。

元々、我々青年隊隊員はほぼ全員が独身（単員）移住しているから、此の移住地に来る青年隊隊員の殆どがガタパラ移住者の娘さんと結ばれている。斯く言うワシも此処の移住者宅に頼って来た「娘」と一緒になっている。

但しワシは此の地に骨を埋める「気」はなく、何時か必ずや祖国日本に帰還するぞ！ と軽い気持ちでアレコレと面白い事をと、一期下の大阪人「山田政二」とリベイロン・プレットで商売を始めた。

先輩達が遣っていたフェイランテ（露天商）から始めた。2トン積みのトラック（フォード）を買い其の車で彼方此方の農家を訊ねてトマト・バタタを畑で買いとり、翌日にフェイラで小売りする。

その街（リベイロン・プレット市、人口約25万）でフェイランテ約50人中に日系人は30人余だった。

戦後來泊の日本人は我々二人だけで結構日系人間での仲は良かった。仲良くなった日系二世たちからも可愛がられて、良く彼等の自宅に「招かれての夜食」に。日々変わった場所での「商売」はワシ等青年隊隊員（二人）にはとても面白可笑しい毎日では有った。

その内に、ワシの細君の「腹」は日々大きくなって行く、その頃知り合いの日本人家族から儂に其のヒトの「店舗」（バル）を買って呉れんか？ と問い合わせて来た。その人は家族ぐるみでサンパウロ市内に「日本食堂」を始めたいとか。

暫し考えて細君と相談の結果、彼の店を「買い取ろう」。リベイロン・プレット市内でのパウリスタ街道筋の「角地」で有るから条件としてはOK。知り合いが居たバンコに行き「金貸して呉れ？」と願ったら日本人会会長の裏書（お墨付き）」が有ればとの事、早速、日本人会長に「お願い」したら



「イイヨ！」と返事を貰い、銀行に行くと、ナニも云わずにワシの預金通帳に大枚？が降り込まれた。其処でワシはまだ26歳にしてバールの主人に収まる。フェイラは全て「山田」に譲って各自が独立出来た。

その年に細君は長男を生む。店はガタパラから若い娘を雇い三人で朝6時～夜10時まで延々と店を開けて稼ぐ。商売は順調では有ったけど、やはり長時間の店番にワシも細君も雇った娘たちも毎日々クタクタに疲れ果て、借金は3年目には「完済」出来たし、細君は二人目の子供が日々大きく育ち、もう「良いや！」と言う気になって、知人の日本人夫妻に「買って呉れ！」と、購入した際に支払った金額そのまま買い取ってもらい、ワシ等一家はガタパラ移住地の知人の「空き家」に引っ越した。

小型乗用車を持ち込み日夜移住地内の「知人宅」を訊ねて「賭けマージャン」に明け暮れて細君に日々叱られる。昼日中は長男の息子を連れて移住地内の低地水路に「ジャウー」と言う名の魚釣り。自宅に帰って、釣ったジャウーを塩干しして喰えばナント美味しいではナイカ！

兎も角その一年間はナニもせず遊んで暮らした。丁度一年後、移住地の知人宅の土地を借りて門脇君に依頼して小さい家を建てて貰った。

その家の玄関口を広い「店舗」にして其処で「雑貨屋」を始めた。その店を開店する前日、前の借家で飼っていた豚二頭を裁き移住地内の主人達を全員（約120名）を招待して我が家の「開店祝い」をした。

当時ガタパラではコチア産組の技師が移住者の農業指導をし、売店では移住者家族の生活用品アレコレを販売していたけれど、朝9時～夕刻5時までだったので、移住者達としては時間的に実に「不自由」で、ワシは其処に「目を付けて」移住者相手に生活用品の醤油・食油・酒などの計り売りを思い付いた。例えば、醤油は樽詰め（200ℓ入り）で仕入れ、1ℓでも2ℓでも欲しいだけ瓶詰め販売できる、味噌なら500gでも1kgでも自由

に量り売りが可能、酒（ピング）も樽詰め200ℓを置いてビン詰めで欲しいだけ「計り売り」が可である。家庭での必要食品も諸々のインスタント食品をサンパウロの食料問屋から箱詰めに仕入れて小売りした。

サントス海岸の漁業者に頼めばいろいろの干し魚（イワシの干物など）も準備しておけば移住者達は大喜びであった。

コチア産組に努める「職員」達も我が家に醤油・酒（ピング）・干物等々を買いに来る。ワシはアチコチ車で駆け廻り、イロイロ日本人好みのインスタント食品類を仕入れて店に置く。特にインスタントラーメンは飲ばれた。

ワシの「店」の近辺には多くの「養鶏場」があり、ワシが飼っていた犬が夜間に鎖を外して近辺の養鶏場に入って、鶏が餌を金網の間から餌場に首を出したり引っ込めたりする鶏の「首」にかみつきの数羽～数十羽？ 殺したとかで、我が家に怒鳴り込んできた。「アンタの飼い犬に数十羽の鶏が殺された！ 如何して呉れる！」と怒鳴る。ワシもビックリして「如何すれば良いのでしょうか？」と答えても、相手は興奮しているから「如何するか自分で考えろ！」と怒鳴る。弱ったワシは「一寸待ってくれ」と言って部屋に帰り25口径に「弾」を込めて親爺さんの所に「犬」の首を引いてきて、いきなり犬の頭にブツ放したら、親爺はビックリして「ヒャー」と言って逃げ還った。

其の後何も言って来なかったけど、後日道で出会った時には、そのおやじさんの方がワシから目を逸らした。

或る日の午後、ワシの幼い息子達二人が我が家の裏で兄弟もつれあって遊ぶ様子を観ていて、この子供たち（兄・4歳・次男2歳）の成長はとても「幸せ！」な情景で微笑ましいと思えたが、この子等は将来大きくなって「何故、自分達はブラジル人なのか？」と不満に思う事が有れば、此の息子達に如何様に「説明できる？」と自問自答する。

数年後には「小学生になる」ハテサテ？ しばし考え込む。この国の義務教育は日本と較べて教育水準が低いと思える。

数日後に我が細君とその話をしてみると、ウーンと言ってからこの子等にはやはり日本で「義務教育から育ててやりたいけど」云々。

暫くして、ヨシ！ アレコレ言わず「日本に還ろう！」と決めた。

やはりワシもアンタも日本人だ！ もう充分ブラジルを観た。この子等の為に「ニッポンに還ろう！」。「衆議一決」其の日に店を売る事も決めて、家具類・家材一式を友人知人へ配ることにした。

次の日にワシはサンパウロに行き、大阪商船事務所を訪ね当て「日本行きの際は何時か」と問えば、ナントその月の月末あと10日後の「アルゼンチナ丸」である。ナントワシが丁度10年前に乗って来た同じ船である。

早速ガタパラに返り、さあ寄港準備！ 親子四人の「着替え」だけ残し10年間にためた衣類など一切を右から左に全て「整理」した。

息子等二人共に何やら両親がバタバタ駆け回るから、ワシ等両親の行動を眺めている。ヨシヨシお前達はワシ等の「子供だ！」と頭をなでる。

乗船の前日ワシ等一家はサントスのホテルに泊まり、当日は門脇君他3人の友人達がサントス港にワシ等一家の帰国を見送りに来てくれた。

ワシは渡伯して丁度10年目に帰国する。細君は6年目になったとか。ウーンやはり日本人は日本で暮らさねばナア～。

その夜しみじみと日本に還られる「ヨロコビ」を語り合った。



## イスタンブールを訪問

静岡県富士宮市にて 8期 志方進

息子たちが呼んでくれたので家内と共に日本へ来ました。家内の弟夫婦が住んでいるイスタンブール経由でした。

9月23日(土)夜11時半ごろサンパウロ・グアルーリョス空港発、イスタンブールに24日(日)19時頃(現地時間)着。家内の弟が出迎えてくれて、彼の家で奥さんの料理を4人でゆっくり食べて談笑しました。

25日(月)から27日(水)の3日間はイスタンブール各所を見物しました。



イスタンブールの市内道路



As ruas da cidade Istambul



ここ欧州側に停泊中の豪華客船。  
O navio luxuoso ancorado no estreito Bósforo. A margem oposta é a Ásia.



ボスポラス海峡。対岸はアジア側



ボ海峡をまたぐ橋、右が欧州側で、左がアジア側。下流が見えます。

Uma ponte atravessa o estreito Bósforo. Estava voltando do lado asiático.



アジア側から欧州側へ同じ橋を帰っているところです。



欧州とアジアの間なので、私はヨーロッパ人とアジア人の両者が住んでいると思っていましたが、実際に住んでいるのは中東の人々でした。



ガソリンスタンドで働いている人たちが写真を撮って欲しいと要求しました。

下の2枚は街ゆく人々です。



イスラム教徒が多く、女性教徒は頭にスカーフ（ヒジャーブ、ヘジャブ）を被っていました。







宿泊した家の窓から見たイスタンブールのアパート群。

Os apartamentos que vi da janela do quarto de onde dormi.

同市のアジア側への渡し船。この船に乗ってアジア側へ行きました。

A barca que faz a travessia ao lado asiático da cidade. Fui ao lado asiático.



渡航中の船の上から上流側に前々ページの橋が見えました





イスタンブール市内ヨーロッパ側の南部にあるコンスタンティノープルの遺跡を見に行きました。紀元前330年5月にローマ皇帝コンスタンチヌス1世がビザンチウムへ遷都してからコンスタンティノープルという名が定着したそうです。

### イスラム寺院「スルタンアフメット・ジャーミイ」



この様な城壁式の建造物が多数見られました



市内の至る所に国旗が飾られていた。この二枚は飛行場への道路にて。





# 青年隊70周年記念大会報告

富士宮市 8期 志方進

11月25日（土）青年隊70周年記念大会が静岡県富士宮市の全国建設業教育訓練協会富士教育訓練センターにて開催されました。

同市に滞在中でしたので、会長代理として参列しましたので、写真と共に報告します。日本の青年隊同窓会会長の鈴木浩明様と事務局長の菅井文明様には大変お世話になりました。

記念式典では13時30分から鎮魂の儀が興徳寺住職松永泰然様、本源寺住職本間光信様により開催され、参列者全員（80数名）が献花しました。

つづいて、同窓会総会が14時45分頃から開催されました。国歌斉唱後の会長挨拶ではホームページの開設が告げられ、そして、5年任期の新役員をよろしくとのことでした。続いて功労者表彰、来賓祝辞、青年隊綱領唱和、隊歌斉唱で閉会しました。その後、懇親会が郊外の富岳温泉花の湯（ホテル）にて18時から20時まで開かれ皆が談笑しました。



献花



法話

## 大会の様子です



挨拶する鈴木浩明同窓会会長

鈴木会長、栗田名誉会長、菅井事務局長





懇親会の様子です



**【編集委員メールアドレス、ご連絡用電話番号】**

そ が よし なり

曾我義成 ysoga@rimobloco.com.br 事務所(Escritório) 11-4057-2377

携帯(Tel. Celular) 11-97120-0863

ぼんこはらくにひこ

盆子原国彦 kbonkohara@live.jp

おさだたかとし

長田響歳 takatoshi.osada@gmail.com 自宅(Residência) 11-5563-6929

しかたすすむ

志方進 ssshikata@gmail.com

日本では 070-9087-8862

皆様ふるってご投稿ください。ご投稿を受信しましたら、着信通知を発信しておりますが、ご投稿の到着を確認してください。

ご意見、ご提案、お叱りなどもお寄せください。

**【次号予定、お願い】**

次号は1月下旬に発行予定です。

ご投稿は1月21日(日)までにお問い合わせ致します。

**【編集後記】**

今号もご投稿をありがとうございました。

皆様どうぞお元気でお過ごしください。

